

## 『梁塵秘抄』三四七番歌の「小磯の浜」の解釈をめぐって

新村衣里子

## はじめに

平安時代末期に後白河院によって編纂された今様の集大成である『梁塵秘抄』からは、その今様（現代風）という性質もあって当世の人々の心情や生活の様子が生き生きと伝わってくる。後白河院周辺においてこうした歌謡が収集され、修得されていく過程には街道や宿との結びつきが強い女性芸能者や遊女が深く関与しており、注目される。

そこで三四七番歌の、

小磯の浜にこそ 紫檀赤木は寄らずして 流れ来て 胡竹の竹

のみ吹かれ来て たんなたりやの波ぞ立つ

（巻第一・四句神歌・雑）

を取り上げて、特定の地を指すものではないと従来指摘されてきた小磯（磯）の浜が東海道に位置する相模国の小磯を示す可能性について検討する<sup>①</sup>。

また、この小磯は先学によって「恋ひそ」でもあると言及されており、その際に「（な）―そ」の「な」が省略された形の禁止表現

であると解釈される場合がある。ただ、例えば「勿來の関」のように、「な―そ」の形式であればともかく、「恋ひそ」だけで禁止の意と受け止められたであろうか。「老蘇の森」にも「そ」があるが、一般的には「老い」の比喩として用いられており、禁止表現として受容されてはいない。

本稿では小磯が東海道における通過点として認知されていたことを確認したうえで、小磯（恋ひそ）がどのようなイメージを喚起し、どう解釈されたかについて以下に分析を行う。

## 一 小磯の所在地

「小磯」の所在については植木朝子氏が、『梁塵秘抄』の注釈書類において「岩波日本古典文学大系が『相模の小磯が想起される』とする以外は、場所を特定しないという立場を取っている」とし、「大系も相模に限定しているわけではなく、詞章内部にも、相模の小磯に特定できる要素はないので、普通名詞の『小磯』の例と考えてよからう」と指摘されるように一般的には普通名詞あるいは所在未詳とされる<sup>②</sup>。また例えば『小磯』は相模の古い地名に大磯小磯とし

て出てくるが、それを指すかどうかは不明」（『歌謡集』日本の文学・古典編<sup>(3)</sup>）といったように相模の小磯の名を挙げるものでも、判然としないう立場をとる。

しかし、『和歌の歌枕地名大辞典』<sup>(4)</sup>では、「恋その浜（相模）」として、『八雲御抄』の巻第五・名所部の「今様詞也。相模国」を根拠として挙げ、『相模』とあるのは、『恋その浜』を、『小磯の浜』、『相模国余綾郡』、神奈川県中郡大磯町の辺りと考えたからであろう」と解説する。『八雲御抄の研究 名所部 用意部』<sup>(6)</sup>によれば、『八雲御抄』巻第五・名所部の「浜」には「こひその（相模国 今様言也）」（国立国会図書館蔵本、宮内庁書陵部蔵伝細川幽斎筆本）、「こひその（相模国 今様詞也）」（宮内庁書陵部蔵本）、「こひその（相模国 今様也）」（国立公文書館蔵内閣文庫本）とあつて、どの本にも相模国と記される。『藻塩草』の「濱」の項にも「こひその（雲御説）」とあることから、今様に歌われた「小磯の浜」は相模国所在であると受容されていたと考えられる。

『今様の濫觴』<sup>(8)</sup>に「而宿に今様はじまる事、相模国こいその翁の流れをもちて秘蔵ことにするなり」という表現がみえることから、詳細は分からないが、今様にとって重要な地であると捉えられていたのではないか。『梁塵秘抄口伝集』に度々その名が挙がる後白河院の側近の平業房が次に示すように相模守であったという事実からも、後白河院のもとに相模国に関する情報が伝えられていたと考えられる。

米谷豊之祐氏の研究によれば、平業房は安元元（一一七五）年八

月に相模守として自ら造営した浄土寺に後白河院と建春門院の御幸を仰いでおり、治承元（一一七七）年には平家打倒のための謀議、すなわち鹿ヶ谷の変に関与したことで逮捕されたものの、後白河院の再三の要請によって釈放されている。妻の高階栄子は業房の死後に院の後宮に入って観子（宣陽門院）を生み、丹後局として後白河院や源頼朝に対しても影響力を持つようになっていった女性である。そして既に指摘されるように金沢文庫蔵の『転法輪鈔』には、亡くなった平業房のために後白河院が安居院流の澄憲に作らせた表白が伝えられる。『梁塵秘抄』との関係性からいえば、乙前のための表白が有名であるが、新間進一氏によれば後白河院の関係の表白のうち、臣下のためのものであるとして、乙前のほか、師の鳥羽前大僧正、平業房のものであるという<sup>(10)</sup>。

五味文彦氏は「多くの国々が一度は平家の知行国になっていたのに、相模だけが一貫して後白河の近習が知行していたのは、あるいは後白河自身の院分の知行国であった可能性もある」と言及する。氏は、清盛のクーデター後に相模の国司となった藤原範能が、かつて後白河の院分として尾張守になっていた事実に着目して、「相模だけがこのクーデターにおいて後白河の院分として残されたものとも考えられる」と推察する<sup>(11)</sup>。このように、後白河院と相模国との密接な関係性がこの歌の受容の背景に影響しているのではないかと考

平業房が相模守に任じられ、また『梁塵秘抄』が編纂されたと考えられる平安末期頃には、既に相模国府が大住郡（平塚市）から余綾郡（大磯町）へと遷って機能していた。相模国の政務の中心地と

して余綾郡が重要な役割を担っていたことに留意したい。

『吾妻鏡』<sup>(12)</sup> 建久三(一一九二)年八月九日条には、北条政子の出産に際して鶴岡八幡宮や相模の寺社に神馬を献じて誦経したという記事があり、その中に「新樂寺小儀」とあって小磯と鎌倉幕府との結びつきも指摘できる。またこの「新樂寺小儀」に続いて「高麗寺大儀」という名も記される。この大磯の高麗寺に関しては、大磯の宿の遊女との関連性を示す次のような記事が『吾妻鏡』に載る。源頼家が「大磯の宿に泊まって遊女らと歌舞音曲を楽しんだとき、傍輩の妬みによって宴席に呼ばれなかった愛寿という遊女がいた。後で知った頼家が愛寿に祝儀を与えたが、彼女はそれを高麗寺に寄付して逐電したという(建仁元(一一二〇)年六月一日、二日条)。鎌倉幕府の崇敬を得ていた寺社を有する大磯小磯地域における宿と遊女の様子知られる史料である。

大磯や小磯は『和名類聚抄』<sup>(13)</sup>における相模国餘綾(余綾)郡の伊蕪、餘綾、霜見、磯長、中村、幡多野、金目の郷のうち、伊蕪郷の辺りに比定されるが、餘綾郡に含まれているため、「こよろぎ(こよろぎ・こゆるぎ・よろぎ・ゆるぎなど)」としても認識されていた。顕昭は『古今集注』で「コヨロギノイソ」を「サガミニオホイソトイフ所」とする説を紹介し、由阿は『拾遺采葉抄』で「コヨロキノ濱、大磯ハヨロキ、小磯ハ小餘綾ナト申キ」(第一四・東歌)と説明する<sup>(14)</sup>。

その他、大磯小磯についての言及もある宗祇の『名所方角抄』にも「但、こよろぎの磯は大磯の辺をいふ」とあり、『東国陣道記』

にも「大磯といふ所にしはく」とまりて、こよろぎの磯を在所の人に尋ねるに、すなはち此所のよしこたへ待るに」との記述がみられる<sup>(15)</sup>。時代は下るが上田秋成の『冠辞考統紹』<sup>(16)</sup>でも「こゆるぎ」は「和名抄、相模国餘綾郡伊蘇の郷在、後に大磯・小磯と云所なり」と説明されていることから、こゆるぎ(こよろぎ)と大磯小磯はほぼ同一視されてきた地であったことが指摘できる。

## 二 着目される「大磯、小磯」

「こよろぎ(こよろぎ・こゆるぎ)」は、『万葉集』や『風俗歌』にも歌われた地である。特に『源氏物語』にみえる「あるしも、看求むと、こゆるぎのいそぎ歩くほど」(帚木)という表現に影響を受けたであろう中世の文学作品は多い。例えば『竹むぎが記』の「いみじう経営し騒ぎつ、小余綾の看求むと急ぎありく、程なく聞ゆ」や、『真曲抄』<sup>(18)</sup>「遊宴」における「この誰かは求ざるべき主はいまや小動のいそぎて磯菜みるめかり 入江の浜物尋つ 塩干の濁にいさりせん」などが挙げられる。「こゆるぎのいそ」は、その「いそ」という響きから、急いで何かをする様子や「看」<sup>(19)</sup>「磯菜」とともに表される。

この「こゆるぎ」と併行して、平安時代以降には、「おほいそのきしにきよする白浪か打ちみてかへるほどはまさらじ」(元真集・二〇四)や、「おほいそにあさな夕なにかづきするあまも我がごとそでやぬるらん」(永久百首・六五四・仲実)のように、「大磯」が歌に詠み込まれていく。元真集の歌は『夫木和歌抄』にも「おほい

その浦、相模」として「おほいそのうらにきよするしらなみにうらみてかへるほどはまさらじ」（一一五六二）とあり、同様に仲実の歌も「大いそ、相模」「永久四年百首」として『夫木和歌抄』（第三句目「かづきぬる」（一一〇八一））に載る。

『月詣和歌集』<sup>19</sup>には、「おなしやうなる事にて、はらからともあつまのかたへまかりけるとき、さかみの国おほいそといふところより、おのくくにくくへわかれけるによめる」との詞書を持つ、後白河院近臣の静賢による「おもひきやおほいそ浪に袖ひちて別のなかのわかれせんとは」の歌が載る。『宝物集』二四八番（新大系）にも同様に、第三句目「袖ぬれて」として記載されており、「平治の乱で安房国へ配流（ただし丹波国に下向）」となつた際の作かとされている。この歌の詞書からは、交通の要衝としての大磯の特質が浮かび上がってくる。

なお、西行の『山家集』の「磯菜摘みて浪かけられて過にける鰯の住ける大磯の根を」（一四五二）にみられる「大磯」は「普通名詞で歌枕ではない」とされるが、『宴曲集』における「はやむる駒は大磯の いそぎですぐる磯づたひ よせくる浪に袖ぬれて 磯菜つみて」（巻第四「海道下」の一部）の表現や、歌に詠み込まれてきた「こゆるぎ」の風景などとの類似性が認められる。

さらに『夫木和歌抄』では「おほいそのはま、相模」「海道宿次百首」として「松のこだち浪こす岩のけしきまでげに見どころはおほいそのはま」（巻二五・雑七・一一八〇六・為相）とあり、景勝地としての性質が強調されている。

中世の作品において顕著なのは、例えば『海道記』の「大磯浦おほいそのうら 小磯浦ヲ遥はるばるト過すくレバ」といった際の状況を詠じた「大磯ヤ小磯ノ浦ノ浦風ニ行トモシラズカヘル袖カナ」のように、大磯とともに小磯が並び称されることである。この歌は『歌枕名寄』にも「大磯小磯浦」として、第五句目が「かへる波かな」（五四〇一・長明）という表現で載る。

『遺塵和歌集』には、「弘安のころ、あつまへまかりて侍けるに、みちのほとん宿くを、よみつ、けけるなかうた」の詞書を持つ、「たひころも みやこをたては あけかたの 月影のこる このまより（略） あしからも 一よなりけり 竹のした 関もとさかうはやすきて こいそ大いそ さかみかは（略）」の歌が載り、鏑武彦氏によれば「宗成は、当該歌を詠むに当たり、『平家物語』の原型となつた道行や、東海道の遊女たちによって唄われた歌謡に題材を得たと考えられる」とされる<sup>21</sup>。このような歌の成立にも関与するといった点で、東海道の宿や遊女たちが果たしてきた役割の重要性がうかがい知られよう。この歌で小磯が宿として認識されていることにも留意したい。『龜山殿七百首』では「名所磯」として「旅衣波のたよりに東路の大磯小磯ともにみしかな 前藤大納言（為世）」とあるように磯の名所として、大磯小磯が並んだ形で取り上げられている<sup>22</sup>。

散文でも先ほどの『海道記』にみられたように、小磯は主に大磯とともに叙述される。『延慶本平家物語』<sup>23</sup>には、「石橋山の合戦の際に頼朝軍に合流できなかった三浦の人々が「小磯方原」を過ぎて、

波打際を金江河（金目川）へ向かつて進んだ（第二末・十四「小壺坂合戦之事」）とある。また平宗盛の関東下向においては「国々関々打過く、漸日数毛積リケレバ、都二テ間シ大磯、小磯、唐原、トガミガ原、腰越、稲村打過テ、鎌倉ニモ入給ヌ」（第六本・三十一「大臣殿父子関東へ下給事」との表現もみえ、都にもその名が知られていたことを伝えている。同じように「源平盛衰記」でも、和田義盛が石橋山の合戦に向かう時には「大磯・小磯打過ぎて、二日路を一日に酒匂の宿に着く」とあり、結局合戦に間に合わずに引き返す場面で和田が「小磯が原を過ぎて、波打際を忍び通らん」と発言している。他にも頼朝から生暖を賜つて鎌倉から出立した佐々木高綱が宇治河を目指して「相模河を打渡り、大磯・小磯・酒匂宿、湯本・足柄越え過ぎて」と描写されたり、平宗盛の関東下向で「日数経れば、大磯・小磯・唐河原・相模河・腰越・稲村打過ぎて、既に鎌倉に着き給ふ」と記されたりしている。<sup>(21)</sup>

また『平家物語』卷十一「海道下」でも、「戀せば瘦せぬべし、戀せずもありけり」と、明神の歌ひ始め給ひけん、足柄の山打越えて、こゆるぎの森、鞆子川、小磯、大磯の浦々、やつまと、砥上が原、御輿が崎をも打過ぎて、急がぬ旅とは思へども、日数やうやう重なれば、鎌倉へこそ入り給へ」とあり、『撰集抄』にも、名所を連ねた部分で「越の白山雪つもりて、(略) 大磯小磯の浦々は、すぎがたく侍るぞや」（卷二ノ第四「花林院ノ永玄僧正之事」という表現がみえる。<sup>(26)</sup>

真名本『曾我物語』卷五には、曾我十郎が小田原の宿から「佐

河・古宇津・澁美の宿・小磯・大磯・平塚の宿・三浦・鎌倉」に至るまで心に添う遊君を探し求めた末に大磯で虎御前と出会ったとあり、卷六には五郎が十郎のいる「大磯の宿」を出て、「小磯・澁美・古宇津の宿・佐河の濱」を過ぎて早河の伯母のもとへ向かったとの描写がある。<sup>(27)</sup>

さらに『太平記』にも「足柄山の嶺より、大磯・小磯見おろして、袖にも波はこゆるぎの、急ぐとしもはなけれども、日数つもれば、七月二十六日の暮程に、鎌倉にこそ着きたまひけれ」（卷第二「俊基朝臣再び関東下向の事」と記される。

このように大磯小磯は、その「いそ」という響きから「急ぎ」、「過ぎ」という表現と関連付けられる頻度が高く、時にはこゆるぎとともに叙述される。東海道に位置する大磯と小磯が数々の中世文学作品に記載された事実は、平安末期以降、鎌倉と京との往来が増加した影響で人々の関心が寄せられていったことを示している。

### 三 「恋ひそ」は禁止の意か

——「そ」のみに禁止の意を担わせることへの疑問  
それでは「小磯」にはどのような意味が込められているのであろうか。

『梁塵秘抄』（新潮日本古典集成）は、「恋ひそ」の小磯 名が悪い、紫檀・赤木は寄りつかず、来やせぬよ。『恋ひそ』の小磯 嘆くまい、『此方来』と 胡竹なびき寄り、『たんなたりや』の波が立つ」と訳し、小磯については「地名に『恋ひそ』『な恋ひそ』の略。

恋するな、の意)を掛けた洒落。どこの海岸と特定する必要はない」と注記する。<sup>(28)</sup>

また『梁塵秘抄』(ちくま学芸文庫)においても、「小磯」に「恋ひそ(恋するな、の意)」を掛けているとし、前半部分を「小磯の浜」には、「恋するな」と言われて紫檀や赤木は寄っても来ないで、流れても来ないで」と解釈する。<sup>(29)</sup>

古語辞典類においても、終助詞「そ」の項には「そ」が単独で禁止を示すと説明される。例えば『新全訳古語辞典』<sup>(30)</sup>においては、「そ」の単独用法」として、「そ」に禁止の意味があると意識されるようになった平安時代末期以降では、禁止の表現に「そ」だけが単独で用いられた例もある」とする。同様に古語文法の解説書などでも、使用され始めた時期に多少の説の異同はあるものの、「そ」のみで禁止を表す形式が平安末期には出現していたことについて述べる。<sup>(31)</sup>

しかし「そ」のみで禁止を表現するとされる用例は子細に検討すると、実際にはかなり特殊な例ではなかったかと考えられる。細川英雄氏は「―そ」の禁止表現形式について、『覚一本平家物語』や、口語的表現の強い『虎寛本狂言』や『天草本伊曾保物語』、さらには『きのうはけふの物語』でさえも、数えるほどの用例しか見出すことができないため、発生的に特殊な言い方であり、禁止表現体系においてきわめて不安定な位置にあったことを指摘する。<sup>(32)</sup>

そこで古語辞典や古語文法の解説書類に挙げられた「そ」のみで禁止を表すとされる例を検討したところ、次の三つのパターンに分

類できることが分かった。

(1)「な」の代替となる要素(「不」や打消を伴う副詞など)が文中にある。<sup>(33)</sup>

「此ク濫ガハシクテ不御シソ」『今昔物語集』巻第十九ノ第三

「今ハ此ク馴ヌレバ、何事也トモ不隠シソ」『今昔物語集』巻第二十九ノ第二十八

二十九ノ第二十八

「糸此ナ云ソ、不騒ソ」『今昔物語集』巻第三十ノ第二

「カマイテ人ニ見セソ」『蒙求抄』巻六<sup>(34)</sup>

(2)「な―そ」が既出しており、繰り返しの際に「な」が省略される。<sup>(35)</sup>

「冬来とも柞の紅葉な散りそよ 散りそよな散りそ色変へで見む」『梁塵秘抄』四五四番<sup>(36)</sup>

「世ノナラヒニ候ヘバ、ナゲカセ給ソ」『愚管抄』巻第四

(3)「な」の音の響きが文中にある。

「父ノ御故ニ命ヲ失ワム事、歎カセ給ソ」『延慶本平家物語』第六末・十七

「六代御前被召取事」

「さのみ泣き給(ひ)そ」『御伽草子』「三人法師」

「さのみ情をふりすてそ」『御伽草子』「和泉式部」<sup>(38)</sup>

細川英雄氏は「な―そ」の禁止表現形式において、文中における「な」の位置が、かなり自由であることにも言及する。確かに、『大鏡』にも「荒涼して、心知らざらむ人の前に、夢語りな、この聞かせたまふ人々、しおはしまされそ」(「師輔」)とあり、副詞の「な」が述部である「しおはしまされそ」と離れた位置にある。こ

うした事例もあることから、もし「ななげかせ給そ」「な泣き給(ひ)そ」と、「な」が続いてしまう場合、連続することを避けて「な」の音の響きをもつ言葉で代用し、禁止表現を予測させたのではないかと考えられる。『堤中納言物語』における「かかる文など、人に見せさせたまひそ」(「よしなしごと」)も文中に「な」の響きが含まれることが影響していると推察される。

『建礼門院右京大夫集』(新潮日本古典集成)<sup>39)</sup> 九六番歌には、「心とむな 思ひいでそと いはむだに こよひをいかが やすく忘れむ」とあって、「思ひいでそ」は、「そ」だけで禁止を表した例だとされている。終助詞の「そ」の用例としてこの歌を挙げる『例解古語辞典 第三版』<sup>40)</sup>には、「普通なら、『心留むな、な思ひ出でそ』と言うところを、字余りになるのを避けてこのように言ったとも考えられる。そうみるならば、終助詞と副詞の「な」を一つですませてしまったということになる」と解釈されており、この説に従いたい。また(1)～(3)のほか、中世末期から近世の文献には、細川氏が指摘するように決まった言い回しに使われるものも現れる。ただそのような用例(「きのふはけふの物語」「その段は御きづかひなされそ」〔上・五五〕、「そうじて春の夢はあはぬ物ぢや。きづかひなされそ」〔上・六四〕、「人が申共、まことになされそ」〔下・六六〕)にも「な」の響きが含まれることは注目される。

以上の(1)～(3)の分類に入らないものとして、『とりかへばや物語』<sup>41)</sup>巻二の「さまさまに契り知らるる身の憂さにいとどつらさを結びかためそ」が挙げられる。

なお、文法書や古語辞典などで挙げられる次のような例については、他の本を参照すると「な」そ」の形をとるものもあつたり、字体の類似などにより混同や揺れが生じていたりする可能性もあるため、先の分類には含めなかった。

#### A 「な」と「は」

「牛の子にふまるな庭のかたつぶり角のあればとて身をばたのみそ」(夫木和歌抄・巻第二十七雑部九動物部・一三一〇九・寂蓮法師)は、『寂蓮法師集』二六六番の下の句では「角ありとても身をな頼みそ」となっている。<sup>42)</sup>夫木和歌抄の表現の場合でも「ふまるな」に「な」が含まれるので(3)に分類できる。

また「散りぬともほかへはやりそ色々の木の葉めぐらす谷の辻風」(『旺文社古語辞典 第十版増補版』<sup>43)</sup>による夫木和歌抄の引用)や、岩井氏前掲書(注31)引用の「ほかへはやりそ」については、『新編国歌大観』所載の『夫木和歌抄』では「ほかへなやりそ」(巻第十九雑部一・七七六三・源仲正)、また「為忠家初度百首」でも「ほかへなやりそ」(雑・六三五)となっている。

#### B 「そ」と「て」

「我が背子がふりさけ見つ嘆くらむ清き月夜に雲たなひきそ」(『旺文社古語辞典』(前掲書)による古今和歌六帖の引用)の五句目については、『新編国歌大観』所載の「古今和歌六帖」には「雲なたなびき」(第一・三四五)、「くもた

な引きて」(第一・五一三)とある。ちなみに『万葉集』では「くもなたなひき」(巻第十一・寄物陳思・二六七七(二六六九))であり、『綺語抄』では、「くもはたなびき」(三三四)とある。『萬葉抄(宗祇抄)』(『萬葉學叢刊中世編』前掲書〔注14〕所収)には、「雲な、ひきそ」とあって「な―そ」の形をとる。「雲たなひきそ」の場合でも、「な」の響きがあるので分類(3)が適用できる。

C 「な」と「を」、「ナ」と「ヲ」

「肝をつぶし給ひそ」(『新定源平盛衰記』卷十九「文覚入定京上り平家追討の院宣の事」、岩井氏前掲書でも指摘)については、『新訂源平盛衰記』には「肝をなつぶし給ひそ」、また『源平盛衰記(四)』(中世の文学)には、「肝ヲツブシ給フゾ」とある。

また「サレハ由無シ事ヲ云ソ」(池田併治氏による『今昔物語集』の引用)に関しては、新大系では「サレバ由無シ事ナ云ソ」(巻第一ノ第十二)と、「な―そ」の形になっている。「ヲ」と取る場合も「由無シ」の部分に「な」の音が入っているので分類(3)が適用できる。

その他、AからCに挙げたもの以外で、他の本を参照すると「な―そ」の形を取っている例として次のようなものがある。

まず、「人の命終の時は、思はしからん妻子や、惜しと思はん宝などを皆見せそぞ申して侍るめる」(岩井氏前掲書による『宝物集』の引用)については、新大系では「されば、人の命終の時

は、おもはしからむ妻子や、おしと思はん宝などをばなみせそ」と申して侍るめり」とあって、「な―そ」の形式をとる。「皆見せそ」の場合であっても「な」の音が含まれるので(3)が適用できる。

次に、「あの男に物いはせそ。討ちて捨てよ」(湯澤氏前掲書で引用される『平治物語』『義朝敗北』)については、『古活字本平治物語』(大系「保元物語 平治物語」所収)や高橋貞一校註『平治物語』<sup>(46)</sup>では「あの男に物ないはせそ」として「な―そ」の形をとる。

同じく湯澤氏前掲書引用の「やをれ有王、今はかかる憂き事をば語りそとよ」(『源平盛衰記』「有王疏黄島に渡る」)についても、『新定源平盛衰記』『新訂源平盛衰記』は「な語りそとよ」、<sup>(47)</sup>『源平盛衰記(二)』も「ナ語りソトヨ」とあって「な―そ」の形をとる。

従って、基本的には「な」や「な」の代用となる言葉がある場合のみ禁止表現として作用し、「そ」自体に禁止の意はなく、あくまでも添えられた言葉であると考えられる。ゆえに禁止表現を予測させるような語を伴わない「恋ひそ」が禁止の意に解釈されることには疑問が残る。

#### 四 「恋ひそ」の解釈の可能性

それでは、「恋ひそ」をどのように解釈したらよいのだろうか。歌枕で有名な「老蘇の森」(滋賀県蒲生郡安土町)が、例えば「かはりゆく鏡の影を見るたびに老蘇の森の嘆きをぞする」(金葉集・巻九・雑上・五九九・源師賢)と老いの比喩として用いられるように、「小磯の浜」も恋の比喩として受容されたのではないか。

「こひそ」という表現の使用に関しては、まず『万葉集』によくみられる形として、「な恋ひそ」（恋しがるな、恋しく思うな）といった禁止表現が挙げられるが、平安期から鎌倉期にかけては、「な恋ひそ」を含む和歌は管見の限りほとんど見られない。

例えば新日本古典文学大系の『八代集総索引』の各句索引の「こひそ」で得られる例は次のような表現をとる。

I 「恋ぞ」（二例）

筑波嶺の峰より落つるみな河恋ぞ積もりて淵となりける

（後撰集・卷十一・恋三・七七六・陽成院）

みかりするかりはの小野のなら柴のなれはまさらで恋ぞまされる

（新古今集・卷十一・恋一・一〇五〇・人麿）

II 「恋ひそめし」（四例）

恋ひそめし心のみぞうらみつる人のつらさをわれになしつ、

（後拾遺集・恋一・六三八・平兼盛）

恋ひそめし人はかくこそつれなければ我なみだも色変るらん

（千載集・恋二・七〇六・二条太皇太后宮大式）

恋ひそめし心の色の何なれば思ひ返すにかへらざるらん

（千載集・恋四・八九二・太皇太后宮小侍従）

ひさかたの月ゆえにやは恋ひそめしながむればまづ濡る、袖かな

（千載集・恋五・九三〇・寂超法師）

このようにIIの「恋ひそめし」の用例が、後白河院の勅によって編纂された千載集に三首みられることは注目される。その他、千載集の編者である藤原俊成が判者を務めた『六百番歌合』のなかにも、

「恋そむる心の底を尋ねれば人やりならぬ思なりけり」（恋一・六一一・兼宗、「恋そめし心はいつぞ石上宮この奥の夕暮の空」（恋三・七八〇・信定〔慈円〕）、「恋そめし思ひの妻の色ぞそれ身にしむ春の花の衣手」（恋九・一一二三・定家）といった歌がみられるのは興味深い。

「恋そめ」の「初め」には「染め」が掛けられており、赤色系統の色彩を連想させて心情を強調するものも多い。ただ染まる色については特に赤色とは限らず、「恋初めし心の色に積む年は我黒髪に現れにけり」（六百番歌合・恋五・八五〇・信定〔慈円〕）では黒髪が白くなり、「くちなしの色の八千入恋ひそめししたの思ひやいはではでてなん」（拾遺愚草・一四五二）では濃い山吹色で、宗尊親王の「恋ひそむるからあいの衣の色に出て深き心を知らせてしかな」（文応三百首・恋・二〇二）では藍色となっている（新大系『中世和歌集 鎌倉篇』）。

おそらく平安末期から鎌倉期において、「こひそ」は「恋ひそめ」の初々しい様子が添えられている状態を表すものとして好まれて使用されたのではないだろうか。「こひそ」と「恋ひそめ」との関係は、老蘇の森の名の由来を「追ひ初め」だとする『源平盛衰記』における説話を想起させる。熱田社の草薙剣を沙門道行という僧が盗み出すという、『日本書紀』にその原型がみられる話で、それによると、道行が剣を盗み出したところたなびいてきた黒雲に取り返された。再度盗み出した際にまた取り返されたので追いかけてじめたその場所が「近江の国蒲生郡に大磯の森といふ所あり」。

追初森なり」と説明される。「大磯の森」と記されるところに老蘇の森と大磯との親近性も指摘できようが、このように「おひそめ」たことよって「おひそめ」の森の名前が説明されるのであれば、「こひそめ」という響きが「こひそめ」のイメージを喚起したということは十分考えられる。

『梁塵秘抄』三四七番歌では、「小磯の浜」に続いて「紫檀赤木」という言葉が出てきていることもあり、とりわけその色彩を介した結びつきが興趣を催したのではないか。『吾妻鏡』文治五（一一八九）年九月十七日条には、藤原基衡が建立した毛越寺の金堂である圓隆寺について「鏤金銀。蟹紫檀赤木等。尽万寶。交衆色」とあって、万宝を尽くして多くの色を交えているといったところに主眼が置かれている。また『胡琴教録』の「琵琶寶物」において「瞿麥」は「赤木甲」とあり、割注で「はなやかにあからず。下品の花梨木の色也」と、色彩について言及されているのは注目される。<sup>(49)</sup>

難波めぐみ氏は、平安中期に成立した藤原原衡の『新猿楽記』に唐物の交易品として赤木、蘇芳、檳榔子、臙脂、丹の色材が見え、また陶砂（明礬）の存在も明らかであることから、これらは染料として活用され、その陶砂（明礬）を利用して赤に染めていたと指摘している。<sup>(50)</sup>

このような色彩的特徴を持つものとして紫檀赤木が認識されていたならば、小磯（恋ひ初め・恋ひ染め）という表現を契機として紫檀赤木という木材が導き出されてきたことも自然な流れであると捉

えられる。

いずれにせよ、恋の比喩としての役割を小磯が果たしていたのではないかと想定される。『海道記』の大磯浦小磯浦を過ぎる場面です。「雲ノ橋浪ノ上ニ浮テ、鵲ノ渡守リ天津空ニ遊ブ」というように、空を見上げ、鵲に焦点を当てて描写していたのは、小磯の「恋」が織姫と牽牛を連想させたからではなかったか。というのも、織姫については「常に恋するは、空には織女流星（後略）」と『梁塵秘抄』三三四番歌に、常時恋をしているものの代表として挙げられているからである。

## 五 異国からの漂着——揺られ来る「胡竹の竹」

紫檀の性質について『日本大百科全書』<sup>(51)</sup>では、辺材は白色で心材は新しいものは鮮紅色だが、のちに暗紫紅色になり、材質は緻密で堅いと説明される。チーク材より約三割重くて二倍の堅さがあるという。このように紫檀は紅色系統といった色彩的特徴を備えているとともに、堅固で重量感があるという点で、「胡竹の竹」と材質の面でも対照的な存在であると言える。

なぜ「紫檀赤木」ではなく「胡竹の竹」が寄るとされたのか。竹は「ふす、節、むなし、よ」などを通して嘆きや恨み言を連想させる一方で、色が変わらぬものの象徴として、末永い世を祈り、言祝ぐといった祝賀の気分を表現する手段として取り上げられる場合もある。例えば「紅葉する草木にも似ぬ竹のみぞかはらぬもののためしなりける」（貫之集・第三・二七七。『古今和歌六帖』では第三句

目「竹のはぞ」(第六・四二一九)や、「白雪は降り隠せども千代までに竹の緑は変らざりけり」(拾遺集・雑賀・一一七七・貫之)、「君訪はで幾よ経ぬらん色変へぬ竹の古根の生いかはるまで」(拾遺集・雑賀・一一九四)など、色が変わらないという竹の性質と重ね合わせて慶賀の心情を表現している。「新古今和歌集」においてもやはり「年ごとにおいそふ竹のよ、をへてかはらぬ色をたれとかはみん」(賀歌・七一五・貫之)のように、何代たつたとしても変らぬ緑色をして栄え続ける、すなわち永続性の象徴として受容されてきた。

また、「草木ではない竹」という表現に着目した「木にもあらず草にもあらずぬ竹のよの端にわが身はなりぬべら也」(古今集・雑下・九五九)を踏まえた「木にもあらずぬ竹の下根のうきふしにむなしきよ、をまづやさとらむ」(拾遺愚草・二七七二)のような歌もみられる。興味深いのは『道助法親王家五十首』の「木にもあらずぬまがきの竹は冬草の霜につれなき色かとぞみる」(七一六)や、「木にもあらず草にもあらずぬ竹は霜はおけども色はかはらず」(七二二)のような「木ではない、竹」という表現を用いながら「色」について詠まれる歌である。色を変えないという竹の特性は、あえて木と対比して強調することによって、より鮮やかに印象づけられることになる。

外来の竹である「胡竹」については既に指摘されるように、その響きから「こちらに来る」という意が含まれる<sup>(52)</sup>。本稿では深く立ち入らないが、笛の譜の唱歌に<sup>(53)</sup>関連するとされる「たんなたりや(た

んなりりや)」という表現には、相手がこちらにやって来る際の期待感や嬉しさが含まれているのではなからうか。『六百番歌合』の「うらやましわがりこちくと笛の音を頼むる中の人は聞らん」(恋九・一〇八七・季経)のように、羨ましくなるほどの、待つ側の浮き立つような弾む気持ち<sup>(54)</sup>が想像される。

従来、『六百番歌合』の「はるる」と浪路分来る<sup>(55)</sup>笛竹をわが恋妻と思はましかば」(恋九・一〇九〇・中宮権大夫(家房))についての判詞に「浪路分来る笛竹を」といへる、「多くの浪をこそは分来しか」など云<sup>(56)</sup>。『蜀曲の心にや』とあることから、『古今目録抄』料紙<sup>(57)</sup>今様の「もろこしたうなるふゑたけはいかでかこ、まてはゆられこし<sup>(58)</sup>」ことよきかせに<sup>(59)</sup>さそはれて<sup>(60)</sup> おほくのなみをこそわけこしか」との関連性が指摘されてきた。

ここで注目されるのは、俊恵の『林葉和歌集』に「依恋赴遠路」として「はるばると波ちを分けてこゆるぎの急ぐと君はしらずや有るらん」(第五・恋・八六五)という歌が存在することである。恋のために遠路はるばる赴くというモチーフが「こゆるぎ」「急ぐ」とともに詠み込まれている。「こゆるぎ」は、『宴曲集』巻第三「名所恋」のうちに「こゆるぎの いそぎて我やゆかまし」と歌われるように、行動を起すことを示す表現であり、運動性や躍動感を伴う。そもそもこゆるぎの「こゆ」「こゆる」の響きには、(1)時間(月日、年など)、(2)空間(関など)、(3)量や質などの水準(思いなど)が「越ゆ・超ゆ」という意味が重ねられ、「はるばると」といったイメージとも容易に結びつく。

先述の『古今目録抄』料紙今様における「ふみ<sup>音</sup>たけ」が「ゆられ<sup>音</sup>こし」とあるのと同様に、『古今目録抄』料紙今様にみられる「こひそのはまに」の歌においても、紫檀赤木は「揺られ」来ないで胡竹の竹のみ「ゆられきて」と、「ゆられ」という表現が繰り返して用いられている。そもそも「よるき（こよるぎ・こゆるぎ）」の響きは「ゆられ」にも通ずるものである。推測の域を出ないが、「よるき（こよるぎ・こゆるぎ）」という名の地なのに「木はゆられこないで」という気持ちも込められているのかもしれない。「揺られくるイメージ」や「外来のものが流れ寄るイメージ」は、こゆるぎや大磯小磯の地に元来胚胎するものであったから、そうした渡来性がこの歌にも影響しているであろうことは指摘できる。

こゆるぎや大磯地域と隣接する「唐が原」の存在も、この地域における異国的な要素を説明するための証左となろう。「能因歌枕（廣本）<sup>54</sup>」の「相模國」には「こゆるぎの磯」「ゆるぎの浦」のほか「もろこしの原」の名も挙げられる。『更級日記』にも「もろこしが原といふ所も、砂子のいみじう白きを二・三日ゆく<sup>55</sup>」と記されている。この描写については福家俊幸氏によって「もろこしが原」が通過に二、三日を要する長い海岸線とは考えにくい<sup>56</sup>ため、「もろこし」という遙か彼方の地にある異国のイメージが実態を超えた広大な地に形象化していたのであろう」と推察されている。先に挙げた『古今目録抄』料紙今様の「もろこしたうなるふみ<sup>音</sup>たけ」<sup>56</sup>がはるばると多くの波を分けて辿り着くイメージとも重なり合う。しかも既に述べた『延慶本平家物語』や『源平盛衰記』の道行には大磯、

小磯、唐が原と記されており、緊密な関係性を示してもいる。

以前拙稿で触れたように、大磯地域は中世の縁起類においても漂着や渡来の地として重視されていた。『走湯山縁起』には「相模國唐濱磯部海漕」<sup>57</sup>に出現した鏡は、神功皇后と契約を交わした高麗國の神人で日本を鎮護するために渡来したとある。また「箱根権現縁起」には「いそぎ」波羅奈國（本文では「しらないこく」と誤記）を出た中将たち一行が「くわんとうさがみのくにおほいそ」に上陸したと記される。『神道集』「二所権現ノ事」と同様の筋を持つこの「箱根権現縁起」は十四世紀初めのころの制作であると推定されている<sup>58</sup>。

こゆるぎや大磯小磯は、その動きのある風景や交通の要衝としての性質を基盤に、「ゆるぎ」「急ぎ」といった言葉とともに、心だけでなく人や事物の揺れや移動を表現することを可能にした地であった。

### 結びに

以上のように古来、相模國のよろぎ、こゆるぎとして著名であった地が大磯小磯としても着目されるようになったことが、三四七番歌の成立の背景にあろう。流行を取り入れることに敏感であったとされる今様において、小磯の地名が目新しいものとして受容された可能性は大いにある。

そして小磯の浜を恋の比喻として掲げたいうえで、その恋の状態や状況を分かりやすく表現するための手段として紫檀赤木や胡竹を取

り上げたと推察される。赤色系統の色彩を備える紫檀赤木が、貴重で堅固、重厚であるのと対照的に、竹は色が変わらず、軽やかで移動しやすい印象を与える。しかも小磯には「急ぎ」行動するという意も含まれる。「胡竹の竹のみ」の「のみ」には軽く他と比較してあるものを特に強調する意味があり、そのように解釈したい。

従って、三四七番の歌意は次のようになるのではないか。

「恋」の名を持つ相模国の小磯の浜、そこには紫檀赤木といった赤く染めるような重たい高級木材は来ないで、こちらに来るといって軽やかな胡竹の竹がとりわけ吹かれ寄って来て、たんなたりやという波の音のように浮き立つ気持ちになる。

当該歌は、色彩や質感の対比を効果的に用いながら、動きがあつて進展する見込みのある恋を肯定的に表現した今様かと推察される。

#### 引用文献

特に注がない和歌の引用は『新編国歌大観』に拠る。『古代歌謡集』(『風俗歌』、『愚管抄』、『御伽草子』、『江戸笑話集』(『きのふはけの物語』)は日本古典文学大系(以下、「大系」と称す)、『今昔物語集』、『古今和歌集』、『後撰和歌集』、『拾遺和歌集』、『後拾遺和歌集』、『千載和歌集』、『新古今和歌集』、『六百番歌合』、『宝物集』、『閑居友』、『比良山古人霊託』、『中世日記紀行集』(『海道記』、『竹むきが記』)は新日本古典文学大系(『新大系』)に拠った。また、『源氏物語』、『落窪物語』、『堤中納言物語』、『大鏡』は新編日本古典文学全集(『新全集』)、『太平記』は新潮日本古典集成(『集成』)に拠った。

注1 『神楽歌 催馬楽 梁塵秘抄 閑吟集』新編日本古典文学全集 白田甚五郎 新間進一 外村南都子 徳江元正校注・訳 小学館 二〇〇六年

(二〇〇〇年第一版第一刷)。以降の『梁塵秘抄』の引用は特に注記のない限り、この書に拠る。なお四五七番の「波も聞け小磯も語れ松も見よ(後略)」の「小磯」には本稿では言及しない。

- 2 『順徳院と今様』『明月記研究』七号 明月記研究会 二〇〇二年十二月
- 3 外村南都子校注・訳 ほるぶ出版 一九八六年
- 4 吉原栄徳 おうふう 二〇〇八年
- 5 『日本歌学大系 別巻三』久曾神昇編 風間書房 一九八九年(一九六四年初版)
- 6 片桐洋一編 和泉書院 二〇一三年
- 7 『藻塩草 本文篇』大阪俳文学研究会編 和泉書院 一九七九年
- 8 『梁塵秘抄口伝集』(馬場光子全訳注 講談社 二〇一〇年)所収。植木朝子「消えゆく声への焦燥―『梁塵秘抄口伝集』から―」(『日本文学』第五五巻七号 二〇〇六年)参照。
- 9 「後白河院北面下臈」院の行動力を支えるもの―大阪城南女子短期大学研究紀要 一九七六年十一月。『増補史料大成 山槐記 二』(臨川書店 一九六五年)の安元元年八月十一、十二日条に「相模守業房」の名がみえる。
- 10 『安居院唱導集 上巻』永井義憲 清水宥聖編 角川書店 一九七九年(一九七二年初版)。「鑑賞日本古典文学 第十五巻 歌謡Ⅱ」新間進一 志田延義編 角川書店 一九九二年(一九七七年初版)
- 11 「相模国と三浦氏」『三浦一族研究』第二号 三浦一族研究会 一九九八年五月
- 12 『増補國史大系 吾妻鏡前篇』黑板勝美 国史大系編集會編 吉川弘文館 一九六四年。以降の『吾妻鏡』の引用はこの書に拠る。
- 13 『天理圖書館善本叢書和書之部第二巻 和名類聚抄 三寶類字集』天理圖書館善本叢書和書之部編集委員會編 八木書店 一九七二年(一九七一年第一刷)
- 14 『古今集注』は『日本歌学大系 別巻四』久曾神昇編 風間書房 一九九二年(一九八〇年初版)、『拾遺采葉抄』は『萬葉學叢刊中世編』萬葉

- 集叢書第十輯 佐佐木信綱編 臨川書店 一九七二年(古今書院 一九二八年)。
- 15 『名所方角抄』は、早稲田大学図書館蔵 古典籍総合データベース参照(『御浦』の「よろぎ」「こよろぎ」についての説明部分)、『東国陣道記』の引用は『衆妙集』(古典文庫第二七〇冊 土田将雄編 一九六九年)に拠る。
- 16 『上田秋成全集』第一 杉浦書店 一九八七年
- 17 万葉集には「相模治乃 余呂伎能波麻乃 麻奈古奈須 兒良波可奈之 久 於毛波流留可毛」(巻十四・四三三二)、『萬葉集注釋 卷第十四』澤 湯久孝 中央公論社 一九九〇年(一九六五年初版)、風俗歌には「小餘綾の 磯立ちならし 磯ならし 菜摘む少女 濡らすな 濡らすな 沖に居れ 居れ 波や 濡ろ濡ろも 君が食すき 食すべき菜を 摘み 摘みてはや」(「こよろぎ」)、「玉垂れの 小瓶を中に 握えて 主はも(や) 魚求きにて 魚取りに こゆるぎの 磯の若藻 刈り上げに」(「玉垂れ」とある。
- 18 『早歌全詞集』外村久江 外村南都子校注 三弥井書店 一九九三年。以降の早歌の引用もこの書に拠る。
- 19 『月詠和歌集の校本とその基礎的研究』杉山重行 新典社 一九八七年
- 20 『和歌文学大系』二 山家集・聞書集・殘集 西澤美仁 宇津木言行 早稲田大学 二〇〇三年
- 21 歌の引用は『圖書叢叢刊 資賢集 遺塵和歌集』(宮内庁書陵部 一九七七年)、『鏗武彦「高階宗成の東海道下向」―「遺塵和歌集」の長歌をめぐって―』『国文学研究』一五七 早稲田大学国文学会 二〇〇九年三月
- 22 『群書類類』第十一輯 塙保己一 続群書類完成会 一九八七年(一九三二年発行)
- 23 引用は『校訂延慶本平家物語』。前者の例は第五巻 松尾葦江編 汲古書院 二〇〇四年。後者の例は第十一巻 高山利弘 久保勇 原田敦史 編 汲古書院 二〇〇九年。
- 24 『新定源平盛衰記』水原 一人物往來社。一〜二例目(第三巻 一九八九年)、三例目(第四巻 一九九〇年)、四例目(第六巻 一九九一年)
- 25 高橋貞一校注 講談社 二〇〇五年(一九七二年第一刷)。高野本にも「小磯大磯の浦々」の名がみえる(『屋代本高野本对照平家物語』三 麻原美子 春田宣 松尾葦江編 新典社 一九九三年)。
- 26 西尾光一校注 岩波書店 一九七八年(一九七〇年第一刷)
- 27 『妙本寺本會我物語』角川源義 角川書店 一九六九年
- 28 榎川朗校注 二〇一一年(一九七九年発行)
- 29 植木朝子編訳 筑摩書房 二〇一四年。なお『梁塵秘抄 信仰と愛欲の歌謡』(秦恒平 日本放送出版協会 一九七八年)では「小磯は『忍ひそ』で「そ」は禁止の意味だが、ここでは反語的に聴こえます」としている。
- 30 林巨樹 安藤千鶴子編 大修館書店 二〇一七年
- 31 古語辞典類のほか、参照した文法書は次の通り。浜田敦「中世の文法」(『日本文法講座』3 文法史 明治書院 一九五七年。湯澤幸吉郎『文語文法詳説』(石文書院 一九五九年)。穠田定樹『終助詞』(『古典語現代語助詞助動詞詳説』松村明編 學燈社 一九七六年(一九六九年初版))。岩井良雄『日本語法史 鎌倉時代編』(笠間書院 一九七一年。原案「古文における禁止の表現」(『国文法講座』第三巻 山口明穂編 明治書院 一九八七年。以降の諸氏に関する引用も、ここに挙げた書に拠る)。
- 32 「禁止表現形式の変遷」「な」「そ」「な」「そ」について、『国文学研究』第四八号 早稲田大学国文学会 一九七二年十月。以降の細川氏に関する引用もこの論文に拠る。
- 33 細川英雄氏は「禁止の意の所在に関して『不』の判定に問題も残る」ことに触れている。なお『古事類苑』が引用する『大鏡』からの「さらさら〇〇ささらおほしめしそとせし給ふに」(帝王部二十三皇太子下)の場合も分類(1)が適用できる。この表現に対して志田延義氏は「さらさら」が「な」に代わっている感じ」と述べる(『梁塵秘抄詳解(改訂版)』有精堂出版 一九七三年(一九五四年発行))。ただ、國史大系所収『大鏡』(黒板勝美編 吉川弘文館 一九六六年「師尹」)は「さおほしめすべきそ」、また『大鏡全評釈』(保坂弘司 學燈社 一九七九年)や大系、新全集、集成などでは「さし思召すべきぞ」とある。

- 34 中田祝夫編 勉誠社 一九七一年。『室町時代言語の研究』に「極めてまれに左例の如く、『ソ』のみで、禁止の意を表すことがある」として引用されている(湯澤幸吉郎 風間書房 一九八一年)。
- 35 細川氏は、「そ」の発生理由の一つとしてこれらの例を挙げる。前項(1)三例もこれに含まれる。また『今昔物語集』における「痛クナ不早メソ、々々ソ」(巻第二十八ノ第二)の繰り返し部分を「不早メソ」として「そ」の単独用法の例とする説があるが、その場合でも(2)が適用される。
- 36 二度目の「散りそよ」は反復という性質上、「な」がなくとも通じると考えられたのであろう。『梁塵秘抄』における禁止表現については、田中司郎氏の『梁塵秘抄』・『閑吟集』・『神楽歌』・『催馬楽』の禁止表現「な：そ」「な：そ」――『宮崎女子短期大学紀要』第一九号 一九九三年三月) 参照。
- 37 『校訂延慶本平家物語(十二)』松尾葦江 清水由美子編 汲古書院 二〇〇八年
- 38 田中司郎氏によればこの表現は「さのみなさけなふりすてそ」とする本もあるというが、「情」に「な」の音が入っているのでこの分類に含めた(『御伽草子』の禁止表現「な：そ」「な：そ」について)『宮崎女子短期大学紀要』第一八号 一九九二年三月)。
- 39 糸賀さみ江校注 二〇〇五年(一九九二年発行)
- 40 佐伯梅友 小松英雄ほか編 三省堂 二〇〇六年(一九八〇年初版)
- 41 『とりかへばや物語(二)』全訳注 桑原博史 講談社 一九九六年(一九七八年第一刷)。なお新大系や新全集では「つらさ」の部分をつらら」とする。
- 42 『角川新版古語辞典』(久松潜一 佐藤謙三編 角川書店 一九八九年(一九五八年初版))による引用では五句目「身をば忘れそ」となっており、原栄一氏前掲論文でもこの例が引用される。志田氏前掲書(33)においても「忍ひそ」が禁止の意を示すことの説明として引用される。
- 43 松村明 山口明徳 和田利政 二〇一五年。その他、「袖ぬれて別れはすとも唐衣ゆくとは言ひそきたりとをみむ」(後撰和歌集)として湯澤氏前掲書に引用される表現は、新大系では四句目「ゆくと言ひそ」(巻一九・離別驛旅・一三二八)、『宗子集』(曾布川知子編 静岡大学教養部国文学研究室 一九八四年)でも「ないひそ」の形をとり。
- 44 『新定源平盛衰記』第三卷(前掲書24)。「新訂源平盛衰記」第貳巻 大町桂月 至誠堂書店 一九一一年。『源平盛衰記(四)』美濃部重克 松尾葦江校注 三弥井書店 一九九四年
- 45 『禁止表現法史』(『国語国文』第五巻第十號 京都帝國大學國文學會編 一九三五年九月)。他に、氏の論考について言及する細川氏前掲論文や、湯澤氏前掲書でも引用される。
- 46 講談社 一九五二年
- 47 『新定源平盛衰記』第二卷 一九八八年。『新訂源平盛衰記』第壹巻 一九一三年(一九一一年発行)。「源平盛衰記(二)』松尾葦江校注 一九九三年
- 48 『藤原定家全歌集(上)』久保田淳校訂・訳 筑摩書房 二〇一七年(河出書房新社 一九八五年)。以降の『拾遺愚草』の引用もこの書に拠る。
- 49 『群書類従』第十九輯 塙保己一 続群書類従完成会 平文社 一九八七年(一九三二年発行)
- 50 『中世海上交易品に見る色材―アジア海域を取り巻く国々と赤の色について』『紀要』第五二集 郡山女子大学 二〇一六年三月
- 51 相賀徳夫 小学館 一九八六年(一九八六年初版第一刷)
- 52 従来指摘されてきた胡竹と名笛説話との関連性については、植木朝子氏による論考がある(『古今日録抄』料紙今様「管弦」の歌小考)今様の一側面をめぐって『國學院雑誌』第一二〇巻第十一号 二〇〇九年、『梁塵秘抄』に見る流行と聞き手への意識―文学的観点から―『藝能史研究』第二二〇号 藝能史研究会 二〇一五年七月)。
- 53 『純日本歌謡集成』巻一 中古篇 新聞進一編 東京堂出版 一九八八年(一九六四年初版)
- 54 『日本歌学大系 第壹巻』佐佐木信綱 風間書房 一九九一年(一九五八年)

- 55 『更級日記 全訳注』 関根慶子 講談社 二〇一五年  
56 『更級日記全注釈』 角川学芸出版 二〇一五年  
櫻井衣里子 「真名本『曾我物語』研究―大磯の「虎」発生に関する一考察―」（『國文』 第九五号 お茶の水女子大学国語国文学会 二〇〇一年八月）。『走湯山縁起』（『群書類従』 第二輯）。『続々日本絵巻大成 箱根権現縁起 誉田宗庶縁起』 小松茂美編 中央公論社 一九九五年

（しんむら・えりこ 本学非常勤講師）